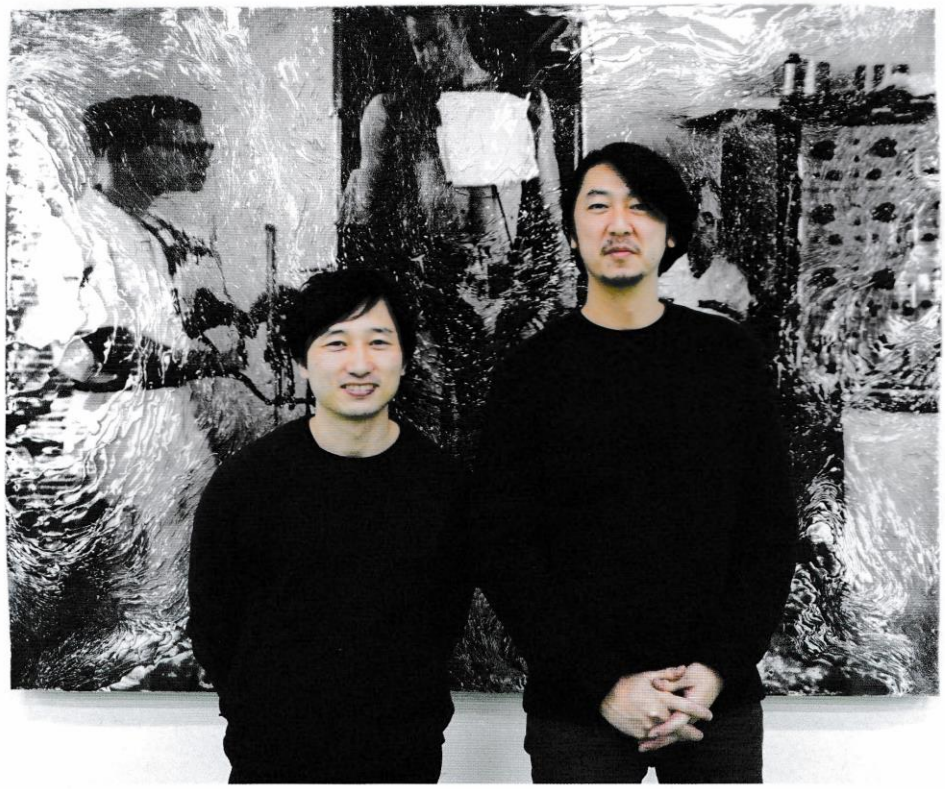
6-6-9 2F Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan
Tel: +81 (0)3 6447 0500 Mail: info@ykggallery.com
www.ykggallery.com

注目の受賞作家にインタビュー

VOCA展2020でVOCA賞を受賞

「対話の中で制作し続けた13年」Nerhol



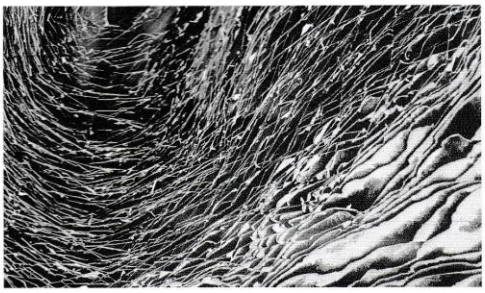
――VOCA賞の受賞おめでとうございます。VOCA展は現代アートにおける平面の領域で活躍する若手作家を支援する推薦制の展覧会ですが、どのような経緯で出品されたのでしょうか？

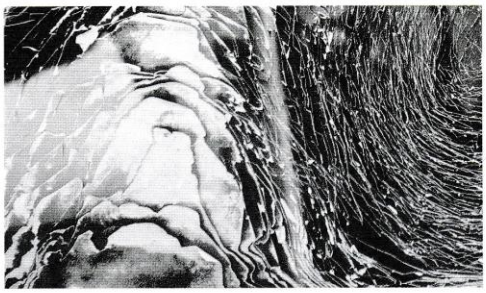
飯田　横須賀美術館学芸員の工藤香澄さんに推薦していただきました。工藤さんが昨年Yutaka Kikutake Galleryで開催した僕らの個展を観に来てくださって、その後アトリエで過去作品をいろいろ見せながらお話して、ぜひVOCAに推薦したいと。ちょうど4月からの埼玉県立近代美術館でのグループ展に展示する新作の準備を始めるところだったので、やりたいようにやらせてもらいました。

――数百枚もの写真を重ねて彫り出すという、独特のスタイルで制作されています。受賞作品の「Remove」（全図10～11頁）は、一見すると何をしているのかわからない三人の男性と思しき人物が見えますが、この素材となった写真について教えていただけますか。

田中　第二次世界大戦下のドイツや、戦後アメリカの人体実験に関

6-6-9 2F Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan
Tel: +81 (0)3 6447 0500 Mail: info@ykggallery.com
www.ykggallery.com





VOCA賞受賞作品「Remove」（全図10〜11頁）の部分。厚い層状の写真を彫り出すことで、画面に奥行きが生まれ、イメージの揺らぎが生じる。以前はカッターのみで彫り進める手法だったが、近作では木工用のサンダーやグラインダーなどの工具も使用してマチエールに変化をつけている。

Nerhol（ネルホル） アイディアを「練る」田中義久と、「彫る」飯田竜太の二人からなるアーティストデュオ。2007年より活動を開始。主な個展に「Interview, Portrait, House and Room」（2017年、Youngeun Museum of Contemporary Art、韓国）、「アペルト04 Nerhol Promenade」（2016年、金沢21世紀美術館）、「Index」（2015年、Foam Museum、オランダ）など。主なコレクションに、Foam Museum（オランダ）、amana photo collection（東京）など。

飯田竜太（右頁／写真左） 1981年静岡県生まれ。2004年日本大学芸術学部美術学科彫刻コースを卒業、14年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。東京を拠点に活動を続ける。

田中義久（右頁／写真右） 1980年静岡県生まれ。2004年武蔵野美術大学造形学部空間演出デザイン学科を卒業後、東京を拠点に活動を続ける。

する資料を調べていた時期に、この写真の元になった15秒ほどの映像を見つけました。最初は中央の男性が電気椅子にかけられているのかと思ったんですが、実際には1969年にNASAが行った宇宙飛行士の無重力テストの様子を映したものだったんです。思い込みによってイメージの意味や見方が変容していく体験をしたんですね。ただ、さらに俯瞰して見ると、当時のアメリカはソ連との宇宙開発競争の中で事故による犠牲者も出ていた。人体実験と技術革新が生んだ犠牲とは、全く別物というわけではないと思えました。時間軸を意識した作品をこれまで作ってきたので、過去の歴史を現在へと接続させるという意味でも、このテーマで彫り進めたらどんなものが出来るのか見てみたいなと。

―― グラフィックデザイナーの田中さんがアイディアを「練る」、彫刻家の飯田さんが「彫る」という役割分担をされていますが、具体的にはどのようなプロセスで制作されていますか。

飯田 制作に入る前に田中と作品**のコンセプトやテーマをとことん話し合って、そこからどんな作業が必要かを検討します。紙を選んで自分たちで刷って重ね、そこから彫り進めていくんですが、写真として見えているイメージと、紙の物質性、積層されていることで生まれる映像的な動き、起伏による立体性などの要素が、なるべく包括的に、良いバランスで成立するように考えつつ制作しています。**

田中 最終的に全体がひとつの作品として帰結するように探っていくのですが、彫ることでどんな変化が生まれるかは実際にやってみないと分からない。その都度対応しながら、飯田と納得いくまで対話を繰り返します。何をもって「良い」と判断するかが難しくて、写真の見え方としての「良さ」と、彫刻的な彫りのバランスとしての「良さ」は異なります。そうした問題を一つ一つクリアして、互いのやりとりを完結させるために作業をしている感覚です。

―― 結成から13年目を迎えますが、長く活動されていると、互いの言いたいことが何となく伝わる、と

6-6-9 2F Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan
Tel: +81 (0)3 6447 0500 Mail: info@ykggallery.com
www.ykggallery.com

いう事はないですか？

飯田　いや、わからないです。

田中　わからないよね。

飯田　分かったような気になることはありますけどね。作品によってテーマや素材は変わるし、問題も変わるので、毎回ゼロから考えて対話する必要があるんです。

「Their Portraits（Nobuhito.M）」2017年　写真プリント
35.7×29.7cm　VOCA展2017出品作品（6点中の1点）

田中　職能が変われば扱う言語も変わります。互いのわからない言葉を、対話することで共有していくことがとても重要だと思っています。

——　Nerholさんは2017年のVOCA展にも出品されたポートレイトのシリーズで広く知られるようになった印象がありますが、昨年の個展では別府のアーティスト・イン・レジデンスの成果を作品にして展示されていました。

飯田　別府では現地でリサーチを行ったり、写真や映像の撮影をやったり、本当に楽しかったですね。この10年間でこんな楽しいことはなかったなと思いました。

田中　そうですね（笑）。過去に韓国でもレジデンスに参加したことがあるんですが、現地での生活も含めて楽しかったですね。

飯田　特に僕らみたいな共同制作している作家には、レジデンスは向いているなと思います。機会があればまたやりたいですね。

——　3月からは受賞作品が上野の森美術館で展示されます。あらためて、受賞に対する思いを訊かせてください。

飯田　VOCA賞をいただいたのは正直かなり意外で、選考委員の方によく選んでもらえたなと思います。

田中　我々のようなプロパーでは無い、ましてや二人組で活動している作家って評価が分かれやすいと思うのですが、今回選んでいただけて、本当にありがたいですね。今回はまあこいつらも頑張ってるか、と努力を認めてもらったのかなと。

飯田　もともと僕が既在の彫刻の世界に反発して、本を素材にした彫刻作品を発表した時に田中が見てくれたことからNerholはスタートしたんですが、初期はアートなのかデザインなのか捉えにくいとよく言われました。そんな中でも僕らの作品を応援してくれた人に支え

6-6-9 2F Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan
Tel: +81 (0)3 6447 0500 Mail: info@ykggallery.com
www.ykggallery.com

VOCA展2020 VOCA賞 「Remove」2019年 インクジェットプリント 150.0×204.0×5.7cm

られて、これまでやってこれたと思っています。

田中 それぞれの分野で培われてきたものをないがしろにする気持ちは全くないんですけどね。ただ人に向けて表現をしている以上、最終的には多くの人に伝わらなければ制作する価値がないと思ってやっています。

飯田 作品を見て「綺麗」と思う人もいれば「気持ち悪い」と思う人もいますが、アートは一つの意味だけを提示するものではなくて、相反するものを同時に放つ複雑性こそが大事だと考えています。だから一義的でない、色々な解釈が可能な作品を作りたい。僕らの作品から何かを受けとめてくれた人たちに、これからも誠意をもって応えていけたらと思っています。

（1月25日、ヤマト美術品倉庫にて）

information

VOCA展2020 現代美術の展望
―新しい平面の作家たち―
3月12日～30日 上野の森美術館

New Photographic Objects
写真と映像の物質性
4月4日～5月17日
埼玉県立近代美術館

「注目の受賞作家にインタビュー」『美術の窓』生活の友社、2020年3月号（NO.438）、 PP.8-11